

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 85 号

平成 21 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの 1 日 1 章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（12）

12 月 2 日 財産喪失

絶対に失ってはならぬ、と心に銘記すべきものがいくつかある。
心の平静さを失ってはならない。

すぐにカッとなる人は困りものである。そういう人を相手にするときには、ニトログリセリンでも扱うように、ひどく気を使わなければならない。いつ爆発するか分からないからである。かんしゃくもちの人は、ひどいことをいったりやったりしたあとで、必ず後悔するものである。

死海文書を残したあの有名なクムラン共同体に入会を希望するのは、必ず口頭試問を受けさせられることになっていた。第 1 の質問は人間関係に関するものであった。「他の人たちがとうまくいっているか」というのが、それであった。これがいちばん大事なことだったのである。

同様に、牧師志望の人にわたしはこういいたい。「他の人たちがとうまくいっていないのだったら、牧師になるのはおやめなさい。すぐカッとなるのでしたら、まずそれをなおしてから、またいらっしゃい」。

理性を失ってはならない。

なにか危険や災害が起こった場合、問題は怪我をした人たちではない。パニック状態にある人々　これがいちばん問題なのである。「まわりの人々がみんな理性を失ってしまい、しかもそれをすべて君のせいにするようなときでも、君が理性を失わないでいられたら」、君はほんとうの君子だ、とキプリングはいつている。

希望を失ってはならない。

自分自身や、仕事や、教会や、あるいはまた世間一般に失望しないで生きていくことは、たいへんむずかしいことである。

たいていの画家たちは「希望」に青年の姿　胸をはり、あらしに向ってほほえみかける、元気いっぱいの青年の姿、を与えてきた。だが、ワッツは違っていた。彼は「希望」を、打ちのめされ、血を流し、手にはかろうじて一本だけ弦の残った豎琴をもち、だが目だけは輝いている女、として描いている。

これこそが希望の真の姿である。すなわち、人生のあらゆる苦しみをなめながら、しかもなお希望を失わない　そのような希望である。いのちある限り希望は消えず、というのは、クリスチャンにとって、文字通り真実である。クリスチャンには、死のかなたまで続く、永遠の生命の希望があるのである。

心の平静・理性・希望　この三つは決して失ってはならないものである。

1 2月5日 宗教批判(2)

以上二つの宗教批判(注 宗教とは狂気である、宗教とは幻想であるという批判。)につづいて、モファットはさらに二つの非常に異なる宗教観を紹介している。

宗教は人を奮起させるものである。

宗教がいつもそうだったわけではない。ジョージ・メレディスは、「宗教とは人生という戦場の最前線ではなく、後方の救助隊にすぎない」といって、宗教に反対している。つまり、彼の見るかぎりでは、宗教は人びとを勇気の要る冒険へと送り出すものではなく、人生の落伍者をひろって歩くものにすぎない、と思われたのである。

...

だが真の宗教は人を奮起せしめるはずのものである。それは、人の心に、自己と世界に対する不満を起こさせるものである。それは人に現実への批判と理想へのビジョンとを同時に与え、現実を理想に転化するための努力へと彼を駆りたてるものである。真の宗教は、自己変革および世界変革へと、人を押しやるものなのである。

宗教は力また平和である。

イプセンは、けいべつしきった調子で、「ちっぽけな信心生活」というようなことを言っている。信心と無力とはさながら同義語のごとくである。

だが、宗教がいくたびとなく、臆病者を英雄に、弱者を強者に、敗北者を勝利者に、挫折者を人生の支配者に、一変せしめたことは、過去の歴史の証明するところである。それは、宗教の与える平和が、隠遁の平和や忍従の平和ではなく、どんな状況にも対処するという確信から来る平和、つまり力の精華としての平和だからである。

狂気、幻想、人を奮起せしめるもの、力と平和 宗教の見方にはいろいろある。が、真の宗教を人々に知らせるには、それを人生の中で実証して見せるほかはない、ということを知るべきである。

12月12日 自己批判

ガーベット大主教は81歳の誕生日の日記にこう書いた。「人びとはわたしに対して分々なまでに親切であった。彼らはわたしを理想化された人間にしてしまい、わたしのことを献身的な牧師、心のやさしい老人、勇気ある預言者だと思っている。わたしが利己的な、自分中心主義の、人の称賛を求めかつ喜ぶ、貪欲な、臆病な人間であることを知らない。...」

ガーベットは自己を批判する能力を持っていた これはあらゆる才能の中でもっとも偉大なものの一つである。

「自分自身を知れ」とギリシアの賢人は言った。多くの人々は自分自身をばら色の色眼鏡で見、自己の欠点について全く盲目である。自分を批判し、自分の欠点を見るということは、自己を改善するためにぜひとも必要なことである。

ではどうしたら自分を批判することができるか。どうしたら、自分の欠点を見ることができるか。それは、ある基準を持ち、それに自分をくравることによってである。

その人が余りに清いので、その人の前に立つと自分の汚れを感じないではいけないという、そういう清い人が世の中に入るものだ。

...

アルキビアデス(注)はソクラテスによくこういったものであった。「ソクラテスよ、わたしはそなたを憎む。そなたに会うと、自分の姿がすっかり見えてしまうからだ」。

われわれはこの基準をイエスのうちにもっている。

謙虚に批判を受け入れる限り、人は批判から大きな利益をうることができるのである。自己批判によって利益を受けない人は一人もいない。イエスがどういうお方であるかを知ることによって、われわれははじめて自分を知ることができる。イエスはわれわれを謙虚ならしめるとともに、われわれに恵みを賜うて、自己を超越させてくださるのである。

(注) アルキビアデス BC450 ごろ ~ BC404、アテネの将軍、政治家

12月18日 別れ道

教会は別れ道に立っている。どちらの道をとるか、いまこそ決断しなければならない。

うしろを見るのか、それとも前を見るのか。...

教会は今日の問題との関連において、そのメッセージを誠実に考え抜こうとしているのか。

過去500年あるいは1000年にわたって行われてきたのだから、これは良いことであり偉大なことなのだ、といつづけるのか、それとも、過去500年も1000年も行われてきたのだから、これはもう現代との関連性を失ってしまっている、といおうとしているのか。これらの問題にわたしは答えない　わたしは問うているのである！

教会は外を見るのか、それとも内を見るのか。

教会はだんだんと小さくなる少数の「内輪」だけの集まりになっていくのか、それとも教会との接触を失った何百万人もの人々に眼を向けているのか。

信徒たちもまたいままでどおりの活動をして、自分たちだけで固まることばかり考えているのか、それとも教会との関係を失った教区の何百人もの人々のことを考えようとしているのか。

今日教会が直面している最大の問題は、教会のなかに引っこんで、孤立した内輪だけの小集団となるか、それとも勇敢に外に出て行って、教会に意味を見出すことのできない人々に語りかけるか、ということである。

ここでもわたしは答えない　わたしは問うているのである。

教会はある程度俗世界に順応することに同意するのか、それともあくまでも俗世界を拒否するのか。...

教会は岐路に立っている。正しい位置を見出す第一歩は、現代がわれわれに突きつけている問題を避けることなく真正面からこれと対決すること、教会のなかに逃げ込んで、なにもせず現状維持にこれ努めるといった態度をきっぱりと捨てること、これがその一歩である。

12月21日 教会に行きなさい！

われわれが教会に行くべき理由が少なくとも5つある。そのうちいくつかについてはすでに触れたことがあるとしても、年の終わりにあたってもう一度考えてみるだけの価値がある。

教会に行くことは、世間の人びとに、われわれの心がどこにあるかを示すことになる。...

教会に行くことは、クリスチャンたちの交わりに加わることである。

教会にいくのは、われわれの忠誠心のありかを外の人々に示すためばかりではない。教会の内側の人びとを知り、彼らとともにキリストのからだの肢体になるためである。

教会にいくのは牧師の手を支えるためである。...

教会にいくとは、神を礼拝し、神に聞き、神に仕えることである。

礼拝には祈祷あり、聖書朗読あり、奏楽・讚美歌・詩篇あり、献金がある。聖餐式があることもある。また沈黙のときがあつて然るべきである。このように多面的な礼拝のどこにおいても、神に会うことができないとすれば、それはだれのせいでもない。われわれ自身が悪いのである。

教会に行くことは、ほかに利益はないとしても、少なくとも自己訓練にはなる。

やりたいときにやりたいことをするという習慣に陥ってしまったら、もうおしまいである。われわれの内なる霊が乾き切ってしまい、心が冷たく無感動になってしまったときでも、霊的自己訓練の可能性は全く失われてはいない。このようなときに神は思いがけなく、われわれの人生の中に突如入ってきてくださる。これはしばしば現実に起こったことである。

神の家で神を礼拝するのは一つの大きいなる特権であるとともに、また義務でもある。この義務を怠るなら、われわれの霊的生活は弱まり鈍らされてしまうだろう。

クリスマスも近い。さあ、教会にいく用意をしなさい。

1 2月23日 とともに分ち合うこと

この世には 2 種類の間人しかいない なにかを他者と分け合う人と、そういうことをしない人とである。そのいずれがキリスト教的であるかは、申すまでもない。

物を分け合うのは義務である。

ルカの福音書によると、群集がバプテスマのヨハネに、「わたしたちはなにをすればいいのですか」とたずねたとき、ヨハネは「下着を 2 枚持っているものは、持たないものに分けてやりなさい。食べ物を持っているものも同様にしなさい」と答えたという（ルカ 3・10-11）

だが、もっとむずかしい分ち合いがある。すぐれた指導者は仕事と責任を下のものにまかせるものである。

わたしはこのことを学ぶのに 30 年かかった。私はなんでも自分でやらないと気がすまないたちだからである。だが、なんでも自分でやろうとするのは、まず自分自身に対してもはなはだ不当なことである。なにかにも自分ひとりでできるわけがないからである。またそんなことをすれば、かならず神経がまいってしまう。

だがそれよりも他者に対していっそう不当なことである。彼らから仕事と責任とを奪ってしまうのは、彼らの権利を奪ってしまうのと同罪である。それはまた、彼らのなすべき仕事に対して彼らを訓練することを怠っていることにもなる。

指導者がいないといってこぼす教会がよくある。それは長年にわたって、牧師たちが全部の仕事を一人占めにしてきた結果ではないだろうか。もしそうだとするなら、そのような慣習は一刻も早く断ち切るべきである。

物を分ち合い、仕事を分ち合うとき、新しい交わりと協調の精神が生まれてくるだろう。そして、自分も他者もともどもに、いっそう幸福になるであろう。

1 2月25日 一つの孤独な生涯

だいぶ前のことだが、スケグネスのYMCAに滞在していたとき、わたしはその掲示板にたいへん変わった掲示が出ているのを見た。...表題は「一つの孤独な生涯」となっており、こう書かれていた。

世に知られぬ小さな村に、ユダヤ人を両親として生まれた一人の男がいた。母親は百姓女であった。彼は別の、これまた世に知られぬ小さな村で育っていった。彼は30になるまで大工の小屋で働いていた。それから旅まわりの説教師となって3年をすごした。

一冊の本も書かず、きまった仕事場もなく、自分の家もなかった。家庭を持ったことはなく、大学に行ったこともなかった。大きな町に足を踏み入れたことがなく、自分の生まれた村から200マイル以上外に出たことはなかった。偉大な人物にふつうはつきものの眼をみはらせるようなことは何一つやらなかった。人に見せる紹介状なぞなかったから、自分を見てもらうことが、ただ一つのたよりであった。

はだか一貫、もって生まれた力以外に、この世とのかかわりをもつものはなにもなかった。ほどなく世間は彼に敵対しだした。友人たちはみな逃げ去った。その一人は彼を裏切った。彼は敵の手に渡され、まねごとの裁判に引きずり出された。

彼は十字架に釘づけされ、二人の盗人の間に立たされた。彼が死の寸前にあるとき、処刑者たちは彼が地上でもっていた唯一の財産、すなわち彼の上着を、くじで引いていた。彼が死ぬと、その死体はおろされて、借物の墓に横たえられた。...

長い19の世紀が過ぎ去っていった。今日、彼は人類の中心であり、前進する行列の先頭に立っている。かつて進軍したすべての軍隊、かつて建設されたすべての海軍、かつて開催されたすべての議会、かつて統治したすべての王たち これらをことごとく合わせて一つにしても、人類の生活に与えた影響力においてあの孤独な生涯にとうてい及びもつかなかった、といっても決して誤りではないだろう。

これはイエスの生涯のまことに美しい描写である。

12月27日 基本的な宗教(2)

右に述べた(ユダヤ教信仰の)13の(基本)原理は、これを三つにつ要約できる。...たしかにこの三つの大原理はまさに宗教の土台となるものである。

(1) 神は存在する。

われわれはこれをいくつかの明快な論理的段階によって証明し、最期に「証明済み」と書いてそれでおしまいというわけにはいかない。神が存在するということは、論理からではなく、経験から出てくることなのである。神を知るといのは、理論を知るように知ることではない。他の人を知ると同じように知ることである。神の助けと愛とを経験した人にとっては、神の存在に関する議論なぞ全く無用なのである。

(2) 神は自己を啓示したもう。

ユダヤ人は、神と預言者と律法を通して自らを啓示なされたとい、クリスチャンは、神はイエス・キリストにおいて唯一無二の形で自己を啓示なされた、ということであろう。だが基本原理は同じである。ギリシア人にとっては、神は隠されていた。が、ユダヤ人とクリスチャンにとっては、神はご自分を人間に知らせたいと思う神である。神はすべての人間に、ほかならぬ神ご自身を与えようとなさっておられるのである。

(3) この世はすべての終わりではない。

といったからとてこの世の価値が減少するわけではない。いやむしろいっそう大切になってくるのである。というのは、この世において行われるすべての行為が永遠的な重要性を帯びるにいたり、一つ一つの行為が永遠の生命を得るか失うかという重大問題にかかわってくるからである。

ユダヤ人とクリスチャンの両者にとって、神は存在し、自己を人間に啓示したもう、そしてこの世は永遠の世界を指さしているこれは宗教の土台石である。

12月28日 発電所

教会はどうしたらクリスチャンの発電所になりうるか。

第1に必要なのは、単純なことだが、働くことである。

仕事はこの世でもっとも過小評価されている活動である、と
いい。働かなくてもできることがある、という一種の幻想が世に
行われているらしい。

大作曲家ウィリアム・ウォルトン卿とのインタビューを、わたし
は何かで読んだことがある。作曲家といえば、椅子にゆったり腰を
おろして、インスピレーションが何かで、美しいメロディーが頭の
中に流れてくるのを待っている人、という風にわれわれは想像しや
すい。だが、ウィリアム・ウォルトン卿はこういっているのである。

「机の前にすわって本気で仕事をしない限り、どんな楽想もわいて
きはしない。ときには、どんなに努力しても、ほとんどみのりがない
こともある。毎日、わたしは、たいてい、9時から1時まで仕事を
し、昼食を取ってからしばらく散歩をし、6時から8時までまた仕事
に取りかかる。インスピレーションが湧くと夕食後も仕事をするこ
とがある。」

インスピレーションは仕事の代りになるものではなく、仕事を伴
うものなのである。それは坐って待っているときにくるのではなく、
机に向かっているときに訪れるものなのである。

第2に必要なのは祈りである。

祈りなしに仕事はなく、仕事なしに祈りはない。この二つは形と
影のようなものである。Laborare est orare（働くことは祈ることであ
る）、仕事は祈りである、と古いラテン語のことわざにしている。

...

祈りによってわれわれの努力に神の力が加わってくるのである。

第3に必要なのはビジョンである。...

力いっぱい働くこと、力をつくして祈ること、眼を上げて、刈り
手を待っている刈り入れものを見ること　これが教会を、キリス
トのために力づくよく働くほんとうの発電所にしてくれるものである。

12月29日 治療法

自分の重荷を軽くする方法は、人の重荷に手を貸してやることである。

自分の悲しみに耐える方法は、人の悲しみをともに負ってあげることである。

ジョセフィン・バトラーがどのようにして一生の仕事を見つけたかを思い出す。ある日彼女が家に帰ってきたとき、小さな娘が彼女を迎えるために2階の部屋から飛び出してきた。その家は中央が丸く吹きぬけになっていた。少女は母親の姿を見ようと、手すりに体を乗り出した。が、均衡を失って1階の床に落ちてしまった。即死だった。ジョセフィン・バトラーの傷心は言語に絶するものであった。悲しみのさなかに、クエーカーの老婦人が訪ねてきた。そして彼女にこういった。「わたしは生涯の大部分を、親のない子供たちの世話をしながらすごしてきました。わたしももうこの年では、40人の子供たちが住んでいる家の仕事をつづけることはできません。いらしてわたしの仕事を引き受けてください。そうすれば、ご自分の悲しみが忘れられますよ」。

ジョセフィン・バトラーは、いって引き受けることにした。もちろん、自分の悲しみ全く忘れてしまうことはできなかったが、他の人びとの苦しみと世話を双肩になうことによって、その悲しみは耐えうるものとなった。

自分の重荷を他者の重荷のうちに忘れ、自分の悲しみを他者の悲しみによって軽くする これが治療法である。

12月30日 主はよみがえりたまえり！

キリスト教信仰の中心は復活である。

復活がなかったら、われわれは十字架の話を知らなかつたらう。

復活がなかったら、十字架は一人の善人が悲劇的な死を遂げた、というだけのことである。そのうわさは幾世紀を経て今日までつづいたかも知れない。が、それ以上のことはなかつたらう。いや、そんなうわさはすぐに消えてしまったにちがいない。

われわれが十字架を知っているのは、復活があったからである。キリストをキリストたらしめているものは復活である。

十字架よりも復活がより強い感銘を与える人生の段階がある。

若いときが特にそうである。...

特に若い人たちに説教する場合には、他のなによりも、この王者らしい人物（イエス）の臨在を、現実を感じせしめるように、語らなければならない。十字架の宣教と復活の宣教との間に甲乙をつけるつもりは全然ないが、多くの場合この二つの宣教が正しい均衡を持ってなされていないのではないか、とわたしはいいたいのである。

十字架についていくら説いても説きすぎることはない。それはその通りである。しかしわれわれは復活について語ることがあまりにも少なすぎるのではないだろうか。

第2世紀の初め、いやおそらく第1世紀の終わりごろ、主の日が安息日にとって代ったことは明白である。イグナティウスは、クリスチャンがもはや安息日を守らず、その代わりに主の日を守っていると知っている。

安息日は1週の最後の日であり、神が6日にわたる創造の仕事を7日目に休まれたことを記念したものである。

日曜日はこうして生まれたのである。日曜日は、キリスト教会が、主はよみがえりたまえり、ということのを思い起すべき日なのである。

復活は1年に1回、イースターの日語ればよいというようなものではなく、日曜日ごとに思い出されるべき大事なことなのである。...

12月31日 終り

人生には終りがある。それがいつ来るか、だれも知らない。だから人生はつねに、「いまがそのときだ」といているのである。

人生には終りがある。

人間に与えられた時間には限りがある。だから、きょうできること、またきょうなすべきことを、あすにのばしてはならない。あすという日が来るかどうか、だれにも分らないからである。

ところがわれわれは往々にして、時間はいくらでもあり、人生は無限であるかのように、生きている。そうではないのである。

なすべきことがあるなら、いまなすべきである。

人生には目的がなければならぬ。

telos というギリシア語は「終り」を意味している。が、それだけではない。「目標」、「目的」、「完成」という意味ももっているのである。

われわれはその意味の“end”(「目的」)をもっていなければならぬ。人生はいろんな横道を目的もなく歩きまわる、といったものであってはならない。目標がなければ、漂流するほかはない。

目的を持つとき、人生は巡礼の旅となるのである。

人生は最後までわからない。

あと一步というところで思わぬ災害が襲ってくることもある。これが人生のこわさである。失敗したり、誘惑に陥ったり、長年にわたって築き上げてきたものを一瞬にして崩壊せしめたりする可能性は、最後までつきまとう。「たえざる警戒こそ自由の代価」である。最後まで警戒を怠ってはならない。

最終の目的は神に会うことである。

「なんじの神に会う備えをせよ」とアモスはイスラエルにいった。時間の終りは永遠である。人生の目的は神である。人生の最後の一步は神の現前にいたる一步である。

なんというすばらしい完成だろう！